聖書宣教会通信

Japan Bible Seminary Newsletter

No.175
2018.12.1

巻頭言
Greeting

×

岩井 基雄
Motoo Iwai
聖書宣教会 評議員
（清瀬福音自由教会牧師）

Profile

1961年高知県生まれ。公立中学校で4年間の教諭後、献身。聖書宣教会31期卒。蕨福音自由教会で副牧師を2年、清瀬福音自由教会の牧師として現在に至る。(学)玉川聖学院　非常勤講師。PBAバイブルメッセージ担当。

「主の恵みによって」

主の「受肉」の恵みを深く味わうこの時期、その意味をもう一度考えさせられます。

献身に導かれ通った学舎は、東京杉並の閑静な住宅街にありました。古材で建てられた存在感ある旧校舎には、みことばにこだわり続ける個性溢れる先生方の優しい笑顔がありました。聖書信仰に厳格に立ち、みことばの原語と取り組み続ける学びは、今なお私の献身の姿勢を問い続けます。都心を離れた羽村での交わりは、主への祈りを深めました。初めての家族寮などでの率直な交わりと祈りは、今も主の教会に仕える原点です。

主のみからだなる教会を建てあげる使命を確認させられる中、多くの課題の前に自分の無力さを痛感します。時間に追われる中、自分自身の主との交わりが枯渇しているのを感じることが少なくありません。時には、みことばとの格闘や、人々と共に歩むことを避けたくなることもあります。しかし折々に、ふと恩師達の静かな祈りの姿、主に向かう姿が思い出されるのです。そして牧会で行き詰った時、実際に恩師に相談し、祈っていただいた恵みも想い出します。主のからだなる教会を建てあげていく苦悩と祝福を覚える中、主が備えてくださっていた助けや、用意されていた不思議な脱出の道、主の臨在と平安…ひとつひとつに気づかされ、その恵みに支えられて来たことに心が留まります。そして、主のご降誕を祝うこの季節、創造主なる御子の受肉の恵みと謙卑、主のみことばをまっすぐに届ける使命への招きとチャレンジをも改めて覚えるのです。

牧会と共に、舟喜信師から働いてみないかとチャレンジを受けて始まったミッションスクールでの聖書の授業、羽鳥明師の祈りを通し加わらせていただいた放送伝道でのメッセージ…みことばをまっすぐに、分かりやすく届けたいと願いつつ、自分の中に真にみことばが生きているのかを問われ続けています。あらゆる時、特に「主のみことば」を届ける使命と困難さを覚える時に、「あなた、召命あるの？」…とのヘンリー綾部師の言葉が心に響くのです。そして頑ななまでにみことばに立ち、ただじっと主の前に祈っていらした舟喜順一師の姿に、祈りと主との交わりこそがあらゆる働きの初めであると教えていただいた恵みを、改めて深く覚えます。

地上の使命を終え、主のもとに戻られた多くの先生方を通して教えられた者の一人として、また主が名を呼んで召し出して下さった者として、その「召命」と、愛と恵みの招きを日々確認しつつ、弟子の足を洗われ、恵みとまことに満ちる主に倣う者でありたいと願います。

No.175 Topics

- p03　研修生の学びの証し
- p04　教会奉仕の証し
- p05　家族寮から
- p06　「祈りの日」を振り返って

平和をつくる者

赤坂 泉
Izumi Akasaka
聖書宣教会 校長

「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるからです。」マタイ5:9

前期終了、そして後期へ

学期が終わる度に、主の恵みの豊かさを思います。値しない者たちに注がれている主の愛を覚えて感謝し、御名をほめたたえます。

夏の後半から、研修生の骨折、飯島師の骨折、久利師の最終講義など、普段と違った出来事が続きました。理事にも健康課題があり、人事の必要も続き等、祈りの課題は尽きません。一方で、家族寮で2人の出産、さらに複数の懐妊の報と、嬉しい変化も続いています。一同、主を仰ぎ見て歩みを進めています。

調整期間中のリトリートでは中村敏師が奉仕してくださり、アメリカのプロテスタント史と福音派と政治の関わりについて学び、考え、一同良い退修の時を得ました。ちょうど横山師が短期留学、津村師が各地訪問で北米におられる期間と符合し、少しばかりですが臨場感を覚えつつの時でした。

後期は研修生30名と聴講生13名が羽村で学びます。四ッ谷の聖書講座では櫛田信先生が奉仕してくださいます。浜田山の教会合唱講座では飯島師と馬場義実先生が講師として奉仕し、松本任弘先生も詩篇の学びを導いてくださいます。他所で提供される聖書神学舎教師陣による発信も含め、みことばに仕える者たちの育成のために学舎の働きが用いられるようお祈りください。11/10のオープンデイには約３６名が羽村の学舎で授業見学と礼拝と交わりの一日を過ごしてくださいました。賛美礼拝も祝されたに違いありません。(11/21記)

そして間もなく冬の調整期間です。卒業予定者が最終コーナーをしっかりと走り抜けて、良き学びを完遂できるようにお祈りください。

新年度に向けて

10月には新年度要覧が発行され、入会願書の受付が始まっています。今年は日本青年伝道会議Ⅱもあり、伝道者としての献身を問われる機会はいつも多々あるはず。老若男女を問わず、主に召されている方々が、御声を聞き分け、御旨にお従いして踏み出せるように祈っています。

神学校教育と運営が適切になされるために、人材も経済も何も、必要なリソースはすべて主が供給してくださることを信じています。一般的な表現になってしまいますが、どうか主の御旨が明らかにされ、速やかに実現するようにお祈りください。

教会の祝福を

同窓生の異動の報が多い季節です。新たな使命への派遣もあれば、主の備えを喜びながらのバトンの受け渡しもあります。病に止められる働きがあり、困憊の果ての中断もあり、不協和音が鳴り止まないこともあったりします。牧師教師も教会の一同も、主から目を離していないか、値しない者が恵みに生かされているという事実を忘れていないか、愛しているか、と真摯な自己吟味を怠らないようにしたいものです。主の聖臨在の前にとどまり、主の助けを祈り、約束されている祝福へと歩を進めたいのです。

神学も政治も経済も社会全体も、渾沌の増大が加速している時代なのだと思います。主の民の、平和をつくる働きが強められ、社会の祝福のために用いられますように。諸教会の祝福を祈っています。

02 研修生の学びの証し
A Student's Testimony

みことばを土台として

杉本 信（しん）
聖書神学舎本科3年

「聖書はすべて神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です」（Ⅱテモテ3:16）というみことばを握りしめ、「聖書をもっと知りたい」と願って、私は2016年4月に聖書神学舎に入会しました。それからは日々、学びの中で聖書を知る機会が与えられています。

3年生の前期を終えた今、多くのことを学ぶことができたと振り返ります。牧会について、聖書の概論と緒論、教会の歴史、礼拝についてなど、どの授業もみことばを土台とした授業でした。そしてそれらの学びは、全てみことばを学ぶために必要なものでした。

1年生のときは、原語（ギリシャ語とヘブル語）の学びに多くの時間を割きました。慣れない文字や聞きなれない単語、日本語とは異なる文法など、とにかく覚えることが多くて大変でした。しかし2年生になってからは聖書を原語から読んでいく授業が始まり、学んできた文法知識が活きてくることに喜びを覚えました。また聖書を原語から忠実に読むことで、今まで気づかなかったことも教えられ、「聖書神学舎に入会して良かった」と心から思いました。

3年生になった今も、忠実に聖書に聴く訓練が続いています。とりわけ釈義発表の授業は、聖書神学舎における学びの醍醐味だと思います。受講生にはそれぞれ聖書箇所が割り当てられ、そこから学んだことをレポートにまとめて発表し、その後には先生の指導の下でディスカッションが持たれます。釈義発表の授業は単なる知識の取得に終始せず、そこにいる一人一人が共にみことばから教えられ、感動を分かち合う素晴らしい機会にもなります。授業の中でもみことばに教えられ戒められるのは、本当に幸いなことです。ときには学びが辛くなることがありましたが、日々持たれるチャペルの中で、みことばからの励ましを受けました。主の憐れみの中で学びを続けられています。

また、聖書神学舎での学びが将来の働きに繋がっていることを、日々実感しています。学びを続けていく中で、聖書の権威を認め続けることの大切さを教えられています。価値観が多様化し、また変化し続けるこの時代にあって、教会は「誤りなき神のことば」である聖書に堅く立つことが大事なのだと思わされています。ですから将来は牧師として、みことばを忠実に宣べ伝える働きをしたいと願っています。

聖書神学舎で学ぶ機会が与えられていることを、主に感謝いたします。多くの方々の祈りに支えられていることを自覚しつつ、これからも学びに励んでまいります。

（写真：著者 講壇横）

03 教会奉仕の証し
In the Church

教会奉仕の恵み

中西 健彦（たけひこ）
聖書神学舎本科4年

教会奉仕、それは研修生活において学びの実践の場であり、教会的なモノの見方を身につける格好の場です。各地に建てられた主の教会の多様性を見、そこで仕えておられる働き人や兄弟姉妹の姿から、多種多様な教会形成のモデルを見せて頂いています。

宣教会で4年間を過ごす中で、私の場合は毎年奉仕先が変わり、様々な教会の姿から学ぶことが許されました。戦後まもなく設立された教会から開拓期の教会まで、その教会文化や人数の規模も様々ですが、それぞれの教会ならではの幸いな出会いが与えられています。教会学校・個人伝道・礼拝に携わる奉仕など、実際に牧会の働きに出る前にチャレンジできる機会は貴重です。また、学年が進むにつれ、将来の働きを見据えて「自分が牧会者ならどうするだろうか？」ということを考えながら、現場で労苦されている先生方の知恵から教えられ、奉仕に携わることが許されていることを感謝しています。

今年度は、JECA甲府キリスト福音教会でご奉仕させて頂いています。この教会では地域に広く福音を届ける教会を目指して、色々な伝道のチャレンジが行われています（例えば、不登校生徒のための集会や留学生伝道など）。自由に意見を言い合える気風があり、今後の教会の方針を決める信徒会・役員会などに出席する中では、牧会上の様々な気付きが与えられます。また、教会学校の幼少科・中高科から青年会まで幅広い年代の人達に関わりながら、メッセージ・奏楽・司会・学びの提供などを通して教会形成のお手伝いをさせて頂いています。その他にも、今年参加したイスラエル旅行の報告会や、夫婦で中高生向けの恋愛結婚の学びも担当させて頂く（予定）など、自分たちならではの奉仕の機会も与えて頂いています。

また、年に数回、甲府キリスト福音教会の山梨県内の姉妹教会においてご奉仕する機会が与えられています。現在無牧である昭和町キリスト教会、過疎化の進む地域にある峡南キリスト教会での礼拝のご奉仕にも携わり、地方伝道の課題と祝福について新しい気付きを与えられています。

毎週片道100kmという移動距離ですが、その道中に夫婦で教会での出来事を分かち合うことも恵みの一つです。1年という限られた期間ではありますが、教会の皆さんに暖かく迎えられ、家庭に招かれ、祈られる恵みも覚えています。

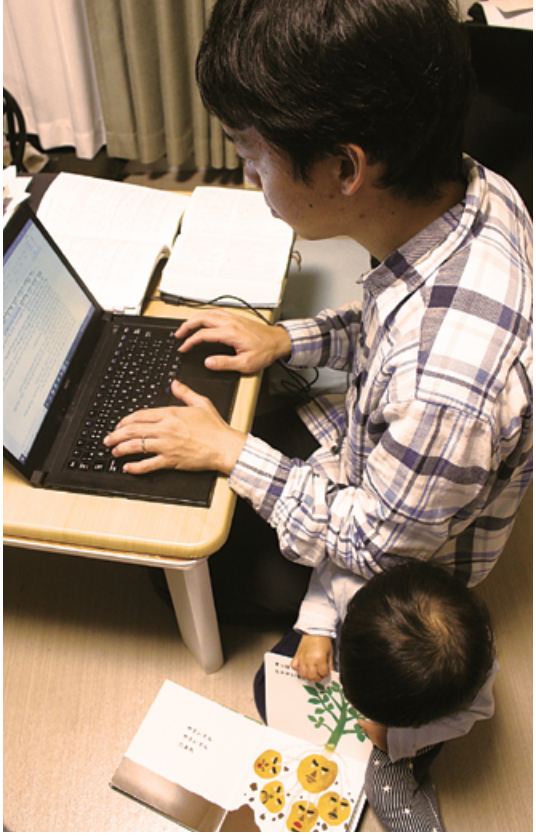
（写真：著者前列右から4人目）

学び（使命）を優先するという訓練

山下 亮（りょう）
聖書神学舎本科３年

家族寮での生活の醍醐味の一つは、研修生家族同士の主に在る交わりです。家族寮祈祷会（1回/月）を含む家族寮の研修生の交わりや、夫人会の交わりを通して、それぞれの祈りの課題を分かち合っています。共に主に召され、学ぶために学び舎に集まっている家族同士で共に祈り合うことができることは大きな励ましです。時には、「○○家は毎晩ご主人が食事を準備しているらしい」ということを伺い、心を揺さぶられることもあります。主は様々な研修生家族を集めてくださることを通して、私たちが自らの家族を主に在って顧みることを励ましてくださいます。

それぞれの家族ごとに、置かれている状況は異なりますが、多くの方が抱えている祈祷課題の一つは、学びと家族の生活の両立です。主に従うことを第一とし、与えられている使命である学びを優先しつつ、一家のかしらとして家族に仕えていくことが問われます。私自身においても、明け方に学びの時間を取り分けていますが、息子が目を覚まして、遊びに来ることもあります。学びの時間を確保するための知恵をその都度祈らされます。家族寮で受けている訓練を通して主に豊かに取り扱われ、遣わされていく者でありたいと願います。



04 家族寮から
From the Family Dormitory

祈り励まし合うこと

野村 マナ
研修生夫人

私たち家族にとって家族寮での生活は神様に与えられた恵みです。献身に導かれた仲間と近くで励まし合えることは本当に幸いです。学びに励む夫たちを支える夫人たちは、共に学び、祈る時を大切にしています。小さな子どもたちは、一緒に成長していける喜びを経験しています。喜びや悩みを共に分かち合い、主を見上げて歩める恵みに心から感謝しています。

私は１年目に第三子を授かり、悪阻などが理由で絶対安静の期間が長くありました。まだ羽村での生活にも慣れておらず、これから先どうなるのだろうかと思いました。当初私たちは、誰かに助けを求めることにためらいを覚えていました。神様から召しが与えられたからには、自分たちで何とかしなければならないという思いが強くありました。けれども、どうすることもできなくなった時、神様は助けを求めることを教えてくださいました。そうした時、家族寮の仲間が祈って支えてくれました。食事をそっと差し入れてくれたり、子どもの面倒をみてくれたり、一緒に聖書を開いて祈る時間をもってくれたりしました。

こうした主にある交わりの中で、互いに祈り励まし合うことの大切さを教えられています。

弱さの中で知ったもの

遠藤 芳子
Yoshiko Endo
和泉福音教会 伝道師

祈りの日に、敬愛する先生方や研修生の皆様とともに過ごす時が許されましたことは、私にとって本当に大きな恵みでした。かつて善福寺川のほとりをひとりで歩きながら過ごした祈りの日のことをなつかしく思い起こしながら、同時に、卒業から今に至るまで、主がいかに真実にこの小さき者をお導きくださったかが心のうちによみがえってきて、胸の熱くなる思いでした。

主人とともに宣教会を卒業して今年で33年、振り返れば、何と思いもよらない道筋を辿らされていることかと思います。私の筋肉の病、主人の発病と召天、その後の三度にわたる癌の手術、娘の背骨の手術・・・。主は、徹底的に私を弱くされました。無力感に打ちのめされて、立ち上がれない時もありました。しかし、その無力さの中で凍りついていた私を、主はゆっくり暖めてくださいました。最も大切なものが次々に取り去られてしまう悲しみの中で、神のみことばだけが、私を本当に生かすものであることを、深く味わわせていただきました。このような弱い私が今ここにあるのは、ただ神の憐れみ以外の何ものでもありません。

私にとって、なぜ主人は癒されず、なぜ私などが回復を与えられているのか、それはずっと、どうしても理解できない謎でした。でも、今、思うことは、主人は癒されることなく死に向き合わなければならない極限の弱さの中で神の力を現すという特別な使命を与えられたのだ、ということです。それは、癒されることを通して神の力を証しするよりも、はるかに難しい使命です。はたで見るのも耐え難い悲惨な病状の中で、すべてを神の主権の中のことと受け止め、神の愛を堅く信じ、天国の希望に目を輝かせて生き抜いた主人の最後の日々・・・それは、たとえ死であっても奪うことのできない神の愛の力を、はっきりと証しするものでした。永遠のいのちの現実を、実感させるものでした。それを誰より間近で見せられた者として、私は、主人の限界の弱さを通して現された神の力を、みことばの確かさを、証しせずにはいられない思いです。

私たちに与えられる弱さは様々です。そして、その弱さを通して神がご自身の力を現そうとされる方法も様々です。私たちは、その神の主権の前に、ひれ伏すべき存在なのだと思います。主が、このために使うと言われたなら、喜んでこの身を差し出すのみです。それがどんなに自分の思い描いたものと異なっていたとしても、それが、神の愛の御手から出ていることを信じる、それこそ真の信仰者の姿なのでしょう。

「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである。」
（Ⅱコリント12:9）

十分な、身に余る恵みに、感謝を捧げつつ。

File No.008

短期留学の証し

横山 昌英
Masahide Yokoyama
聖書神学舎 教師

この度、教師会の推薦により、あるキリスト者事業家による奨学基金からご支援をいただいて、10月から1ヶ月間、米国での研修に従事しています。

研修先はダラス神学校(以下DTS)。かつてディスペンセーション主義の拠点であり、神学舎の創立者のおひとりである舟喜順一先生が、一時期学ばれた学校でもあります。

私がDTSでの研修を希望したのは、D.B.ウォーレス博士の存在に依ります。先生は、近年、神学舎のギリシャ語および新約釈義の授業では必須となっている“Greek Grammar Beyond the Basics”の著者です。現在、DTSでギリシャ語初級とロマ書釈義の2つの授業を受け持っておられます。両方のクラスに、途中からではありますが、聴講する道が開かれ、心より感謝しています。まだ研修の途中でこの原稿を書いています。今までで特に印象に残っていること、考えさせられたこと等をお分かち致します。

ギリシャ語初級は、W.D.Mounce, “Basics of Biblical Greek”とその“Workbook”を軸に、Carsonの“Accents”、Trenchardの“Vocabulary”等を加えて、文法・語彙・アクセント等を組織的に学習させる工夫が見られます。予習や補習の態勢も整えているようです。

釈義で印象深かったのは、ロマ書3章24節に関してです。4章5節にもある「義と認め」るに着目。この動詞と共に、前者は「値なしに(ドーレアーン)」、後者は「不敬虔な者」という語を用いています。これら3語が七十人訳の出エジプト記23章7節(とイザ5:23)に見出されます。但し、こちらは「賄賂(ドーロン)」という語です。パウロは、これと同系統の「値なしに」を用いることで、読者に上記の箇所を想起させ、義認の意味内容を把握させた。つまり「義と認める」は、法廷での「義と宣言する」に解すべきである。換言すると、24節等は従来の“imparted(賦与された)”義認理解よりも、“imputed(転嫁された)”義認を示しているのだ、と。誠に興味深い考察ですが、議論の余地は十分ありそうです。

授業では、受講生に原文を訳させたり、語の分析(パース)を問う場面は意外と少なく、専ら先生の釈義に耳を傾ける内容です。この利点もあるのでしょう。ただ、受講生の釈義習得を目指すのなら、毎回数節の遅々たる進度でも、原文の一語一語、また統語論の点から丁寧に検討させていく神学舎式(?)のやり方が妥当…との認識を新たにしています。

末筆になりますが、今回実に多くの方々が助けてくださいました。お祈りとご支援を心より感謝しています。紙面を借りて、ここに御礼を申し上げます。現地では、中尾邦三先生(第14期卒業)ご夫妻に大変お世話になっています。先生は現在、ノーステキサス日本語バプテスト教会の主任牧師として仕えておられます。同窓のお交わりを通し、「神学舎スピリット」をもって牧会伝道に従事しておられるお姿にとても励まされています。

聖書宣教会通信 No.175 発行者：岸本 紘 〒205-0017 東京都羽村市羽西 2-9-3 Tel 042-554-1710 Fax 042-554-5562 http://www.bibleseminary.jp/ 振替 00150-6-34971（聖書宣教会）

図書館から ー リサーチ・ライブラリを目指して（3）ー

津村 俊夫
Toshio Tsumura
聖書宣教会 研究図書主任・図書館長

1986年から二年間私は、ケンブリッジのティンデル聖書学研究所で研究に従事する機会が与えられました。そこは近くにある壮大な大学図書館と連携していて、聖書学に関する殆ど全ての必要な情報・資料が手に入りました。あのように素晴らしい環境で研究に従事できる特権に与れるのは, 世界中の学者のほんの一握りでしょう。多くの人たちは、条件の整わない中で何とかして必要な情報を得て研究しようと日夜努力しているのだと思います。

宣教会が羽村に移転することになり、都心から地理的に遠く離れました。私の方は、1990年に大学を辞め、専任（「仙人」？）の教師となるように導かれました。大学からの豊かな研究費はなくなり、肩書き社会の日本の一般の出版社から本を出す機会もなくなりました。しかし、新しい静かな図書室が与えられ、そこに移動式書架が導入され、初めて蔵書が一箇所に集められました。そのような中、宣教会の図書館をティンデル研究所のような、聖書学を中心とするリサーチ・ライブラリーに整えて行きたいという願いを与えられました。聖書の翻訳、釈義、聖書神学、講解説教という、聖書神学舎が大切にしてきた教育に資する「研究図書館」の構想です。伏線として、2-3人の方が宿泊できるゲストルームを作りました。それは、リサーチや説教準備のために数日から数週間滞在して図書館を利用できるという、ティンデル・スタイルを目指すためです。（続く）

近況と祈りの課題

□ 学舎の一同、恵みに支えられて、感謝の日々を過ごしています。お祈り、お支えくださる皆様を主に感謝しています。研修生一同の学びと訓練の充実のために、また2頁の記事の健康課題や出産・懐妊などを覚えて、主の前にとりなしていただければ感謝です。

□ 卒業予定者6名の学びと卒業後の奉仕の備えのためにお祈りください。

□ 夏期研修講座の講義録が出版されます。主のために広く用いられますように。

□ 伝道者としての献身者が多く起こされ、その中から学舎にも志願者が導かれますように。

□ 建物・管理関係で：
(1) 台風24号の暴風が3階物干場の大きな屋根を吹き飛ばしましたが、幸いなことに他所に大きな被害を及ぼすことなく、隣地の空き地に落下。主の守りを深く感謝しました。
(2) 誘導灯の蓄電池が寿命を迎え、全21台をLED誘導灯に交換できました。感謝。
(3) 中庭の欅が育ち過ぎて隣地の畑の栄養を奪ってしまい対策が必要です。良い知恵が与えられるようにお祈りください。

□ 学舎が聖書信仰に堅く立って働きを続けて行けるよう、あらゆる面で主の備えが明らかにされるようにお祈りください。一同が、主を恐れ、主の前に誠実を尽くして歩めますように。